

令和4年度第11回霞ヶ浦自然観察会実施結果

日 時：令和5年3月18日（土） 10時～12時

テーマ：身近なコケを観察しよう！

場 所：茨城県霞ヶ浦環境科学センター 研修室、野外施設

講 師：鶴沢美穂子先生（ミュージアムパーク茨城県自然博物館主任学芸員）

内 容：

霞ヶ浦環境科学センターの野外に生育する身近なコケ植物を観察することにより、それぞれの環境に適応したさまざまなコケ植物の形とくらしを観察し、コケ植物への理解を深めることを目的とする。

参加者：23名

担当職員：6名

パートナー：8名

結 果：

今回は、霞ヶ浦環境科学センターでは初めてのコケ植物の観察会で、募集開始から5日間で定員に達してしまうほど人気のイベントとなり、参加者の皆さんも大変楽しみに待っていてくれましたが、残念ながら当日の天気は雨となってしまいました。そこで、野外での観察を短い時間で切り上げ、観察前のレクチャーと野外観察後の室内観察を充実させる形で観察会を進めました。

まず、知っているようであまり知らないコケ植物についてのレクチャーです。コケ植物とはどんな生き物か、コケ植物の分類について、コケ植物の一生について、そして、コケ植物と環境の関係についてなど、クイズ形式で楽しく、約30分間行いました。

雨は降り続いていましたが、雨具をつけて野外に出かけました。十分な観察はできませんでしたが、約10種類のコケについて、生育している環境と一緒に観察することができました。野外観察も約30分間行いました。

そして、研修室に戻って、事前に鵜沢先生が採集しておいてくれたサンプルを少しずつ分け合い、プリントに張り付けて、マイコケ図鑑を作りました。その10種類のコケについて、実体顕微鏡で見える画像をモニターに映して、それぞれの特徴など説明を聞きました。コケ植物は大きく分けて、蘚類、苔類、ツノゴケ類と3つのグループに分けられます。今回は種類数の少ないツノゴケ類の代表としてナガサキツノゴケも観察することができました。室内観察とその解説も約30分間行いました。以下に、説明していただいたコケ植物の特徴を記録します。

今回の観察会は、残念な天気となってしまいましたが、鵜沢先生が雨でも十分観察できるように、いろいろと準備をしてくださり、充実した観察会になったと思います。先生ありがとうございました。

《蘚 類》

○エゾスナゴケ

葉の先が透明で、表面に突起がある。葉の細胞は四角い。葉は乾くと巻く。胞子のうの蒴歯は細長く、乾燥すると開いて胞子を飛ばす。

○コツボゴケ

多くの蘚類の葉は細胞が1層に並んでいて、顕微鏡で観察するとコツボゴケの葉は特に美しい。細胞や葉緑体の観察には最適である。

○ハイゴケ

地面を這うのでハイゴケの名がついた。葉先がくるくる丸まっている。

○ナガヒツジゴケ

葉が長く伸び、ヒツジの毛のようにふさふさしている感じで、ナガヒツジゴケの名がついた。

○ヒメタチゴケ

長い葉の縁にギザギザがあり、葉の中央に太い脈がある。乾燥するとちりちりに縮れる。

○ツチノウエノタマゴケ

ごく短い茎に針のように細長い葉が放射状につき、中央に柄がない球状の胞子のうがついている。

○ギンゴケ

葉が互いに覆いかぶさるように重なって密につくのが特徴。葉先の1/3が透明で、乾燥すると全体が白く見える。

《苔類》

○ジンガサゴケ

葉の縁が紫色がかっている。葉裏に赤紫色で半月形の腹りん片が4列に並んでいる。

○ゼニゴケ

ジンガサゴケが雌雄同株なのに対して、ゼニゴケは雌雄異株。葉の表面に小さな穴が空いている。これを気室孔といい、中に空気を取り込んで、効率よく光合成を行っている。葉の裏は、ジンガサゴケと違って腹りん片は透明。糸状の仮根があるが、地面にくっつくためのもので水は吸わない。

《ツノゴケ類》

○ナガサキツノゴケ

日本では17種のツノゴケの仲間が知られているが、この種は最も身近に見られるツノゴケの仲間。暗い緑色をしているのは、葉緑体が大きいこととラン藻を共生させているためである。土がむき出しになっている花壇の植え込みや水田でよく見られる。

第11回霞ヶ浦自然観察会



開会とオリエンテーション



コケ植物についてのレクチャー



雨の中での観察（センターの建物付近）



雨の中での観察（歩道付近の植え込みの下）



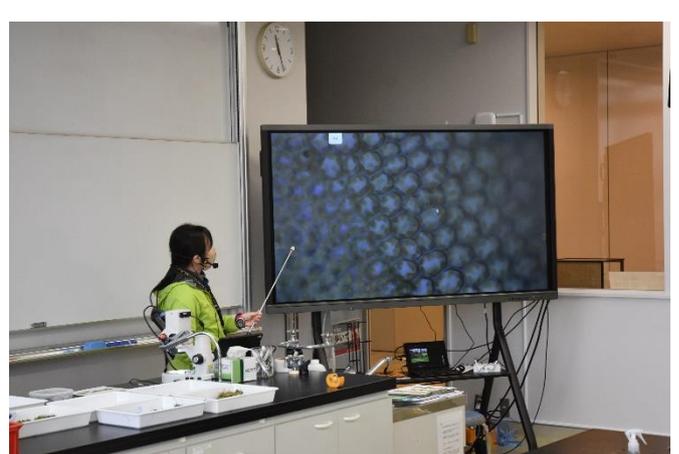
あらかじめ採集しておいたサンプルを取る作業



そのサンプルをプリントに張り付ける作業



出来上がった実物のマイコケ図鑑



採集したコケ植物を顕微鏡画像を使って解説